

第二課 マルクス『経済学批判・序言』

第一日（5月10日）

★第一課の学習内容に照らして、原発災害を考える

- 1、三十五年來の国会質問の記録から  
日本の原子力行政の現状と問題点
- 2、この問題を見る三つの角度  
「安全神話」と利潤第一主義  
「ルールなき資本主義」の典型  
政治の責任——歴代自民党政治と民主党政権がともに問われている

★第二課 『経済学批判・序言』

- 1、学習の主題——史的唯物論。  
科学的社会主義の社会観をつかむこと。  
歴史論だけの問題ではない。現在の社会をどう見るかが中心。
- 2、なぜ『経済学批判・序言』を学ぶか。  
『経済学批判』（一八五九年）とは。マルクスの経済学最初の著作。  
「序言」はそこで自分の社会観の基本をまとめて書いた。全著作の中で  
唯一のもの。  
またその社会観にいたる思想経歴の自己紹介を書いた。
- 3、マルクスの自己紹介を読む。  
革命家としての自己紹介を補って読む。  
資料の年表を参考のこと。

第二日（6月7日）

★第二課 『経済学批判・序言』（続き）

- 4、日本では歴史観の変革が二度あった。  
戦前。野呂栄太郎と『資本主義発達史講座』  
戦後。1945年、言論・思想の自由の獲得以後。
- 5、日本史のあらましを頭においておこう。
- 6、マルクスの定式を読む。  
定式（一） 生産力と生産関係。  
定式（二） 経済的土台と上部構造。  
定式（三） 社会革命の時代。  
定式（四） 革命の時代の土台と上部構造。  
定式（五） 経済的社会構成体。その交替の法則性。  
定式（六） 人類社会の歴史。「前史」から「本史」へ。

## マルクスの経歴年表

### 経済学研究の面で

- 1835～41年 大学時代。ヘーゲル哲学に熱中。
- 42年～43年3月 「ライン新聞」で活動。農民と地主や政府との関係、貿易問題などの論説で、「物質的な利害関係」の問題に取り組む。
- 共産主義思想についての研究を始めることを紙上で宣言する。

43年 ヘーゲル法哲学の批判的研究に取り組む。

44年2月 『独仏年誌』に論文「ヘーゲル法哲学批判序説」を発表。同誌にエンゲルスが寄稿した「国民経済学批判大綱」に衝撃を受け、経済学の研究を始める。

8月～11月 エンゲルスとの共同作業で、『聖家族』を執筆（45年2月刊行）。社会主義と唯物論の立場を明確にする。

45年11月～46年夏 エンゲルスと共同して『ドイツ・イデオロギー』を執筆。史的唯物論と共産主義革命論が本格的に展開される。

### 革命運動の面で

42年～43年 プロイセンの反体制派ブルジョアジーによる「ライン新聞」創刊の計画に最初から関与、最初は寄稿者として、42年10月以後は主筆として、プロイセン専制政治批判の論陣を張る。43年3月、弾圧と社の屈従に抗議して編集部を去る。

43年10月 プロイセンの検閲に拘束されない場所で雑誌を刊行する計画でパリに移り、『独仏年誌』の創刊を準備する。パリで、正義者同盟を始め、社会主義者や労働者の結社との交流が始まる。

44年4月 プロイセン政府が、『独仏年誌』の論文を理由に「反逆罪と不敬罪」でマルクスを告発。

45年2月 プロイセン政府の圧力をうけたフランス政府、マルクスをパリから追放する。ブリュッセルに移転。

46年春。各国の社会主義者や労働者団体との交流を強めるため、ブリュッセルに共産主義通信委員会を設立。

47年1月 マルクスとエンゲルス、

47年9月 マルクス、新聞に「自由貿易」問題の論説を発表。

50年9月 大英博物館を拠点に経済学の研究を再開。

51年10月 アメリカの日刊紙「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」の依頼を受けて、国際論説の寄稿を開始。

57年 経済学の著作の最初の草稿『五七〇五八年草稿』の執筆を開始する。

59年 『経済学批判 第一分冊』を刊行。

正義者同盟に加盟を要請される。6月の大会で共産主義者同盟と改名。その第1回大会にエンゲルスが参加。

47年11～12月 共産主義者同盟第2回大会。マルクスも出席。討論の結果、大会はマルクスとエンゲルスの見解を受け入れ、同盟の綱領の起草を二人に委嘱。

48年1月 『共産党宣言』執筆。

2月 フランスの二月革命。

3月 オーストリア、ドイツで革命。

4月 マルクス、エンゲルス、革命のドイツに帰国。

6月～49年5月 ライン州ケルンで「新ライン新聞」を発行（主筆はマルクス）。民主主義革命の勝利のために奮闘。

49年8月にマルクス、11月にエンゲルスがロンドンに亡命。共産主義者同盟を再建して活動するが、52年11月、同盟を解散する。